

2018年は1938年11月10日にドイツでナチスは帝国議会に放火し、過小評価的に「水晶の夜」と名付けられた年から80年目にあたる。

1933年に様々な本が見せしめで燃やされてからは85年になる。まず5月10日にベルリンで、その後各地で、マインツでは6月23日に燃やされた。

政治・文学的なカバレットがナチス横暴の時代にどう生存していたかについて、セバスチャン・ハフナーは記憶を彼の死後に出版された「ドイツ人の歴史」で物語っている。



「あの頃は、僕らはもちろん、死に対する恐怖の体験と、最終的にどうしようもできない中で、とにかくただできるだけ状況を見無視して、内輪の楽しみだけでも壊されないようにしていた、という、少し自分自身に反対していた時代だった。100年前の若い男女だったら、こういう状況にいて、何をしようかもっと知っていたのでは、と思う。例えば危険と自己喪失のなかでの、大きな愛の一夜とか。でも僕らはなにも特別なことをするには至らず、まさにカバレットを見に行っただけ。誰にも邪魔されなかったから。まず結局見に行っただろうし、嫌なことを忘れられるから。冷血で何にも驚かされないようにみえるかもしれないけど、でもたぶん、これはある種の感情の弱さを象徴していて、苦しんではいたが、まだ最極端には至っていなかった。もし一般的にいいのなら、とにかく当時は、ドイツはとにかくそれまでになかった、犯行には犯罪者がいなく、辛苦なのに殉教者もない不気味な時

代にあり、怪物のような外の世界を、半分麻酔にかかったような、薄弱な感覚で経験するような状況にあった。殺人が、馬鹿な非行少年の気分で行き、自分でなさねばならなかった卑下もしくは受難や、モラル上の死が、些細な出来事のように感じられたり。暴力的な殉難死でさえ、運が悪かった、と取られたり。この日は偶然カバレット「カタコンベ（地下墓地）」に行ったので、無感覚であることは、過剰に有益だった。そしてこれがその晩の2度目の特別な出来事だった。ドイツでは唯一、ある種の反抗的行動が起きていた、公の場に来た。勇気に満ちていて、面白おかしく、上品に行われた行動。午前中はプロイセン裁判所が、ナチスの前で400年の伝統とともに名声もなく消え去ったのを経験した。夕方は数人の些細な、ベルリンのカバレット俳優が、伝統もなしに見事に優雅に名誉を救った。裁判所は倒れた。カバレット、カタコンベ（地下墓地）はたっていた。

カバレット芸人の小さな旗を、勝利に導いた男はウェルナー・フィンクだった。だって、ただ立っていたり、どんな姿勢をとっていても、殺人で脅かす権力者の前では勝利なのだ。この小さいカバレット司会者は、疑いなく第三帝国史上で、名誉の座を占めた。英雄には見えなく、たとえ英雄になったとしても、それはフィンクの意に反してだろう。フィンクは革命的な俳優ではなく、牙をたてた嘲笑者でもなく、すごい武器をもったダビデでもなかった。フィンクの性格は無害さと好意であふれていた。フィンクの冗談は優しく、踊って浮いていた。武器は二重の意味深と言葉遊びで、この点フィンクは日々名手になっていった。「隠されたポイント」なるものを作り出した。もちろんフィンクはこのポイントを、長くやればやるほど、もっとうまく隠すことができた。でも、信念は隠さなかった。無害さと好意心が滅亡リストに挙げられていた国で、フィンクはその保護者としてとどまった。フィンクの無害さと好意心の中に、本当の不屈の勇気が「隠れたポイント」として満ちていた。ナチスの真実をドイツの真ただ中で語った。フィンクのセッションでは強制収容



所が登場し、家宅捜査、一般の恐怖、一般の嘘などを話した。フィンの嘲笑は口に出せないほどの弱音で、切なさや悲愴にみちていた。稀にない慰めだった。

この日1933年3月31日はフィンの最大の夜だった。ホールは、翌日から底なし沼をただ見つめるしかなかった人々で満員だった。フィンは、ぼくが今までには見たこともなかったぐらいに、特別に観客を笑わせていた。とても感情深い笑いだった。もうろうとした意識と絶望を後にした、新たに生まれ出た反抗の笑い。危険が皆の笑いをもっと大きくした。

SS ナチス突撃隊がとっくに来て建物自体を逮捕しなかったのはほとんど奇跡だったかもしれない。たぶんこの夜は、僕は逮捕されても緑のSS車のなかでもまだ笑ってたろう。こんなとてつもない調子で、僕らは危険と不安を笑い去った。」

